

◆2022年1月第2週の礼拝説教

■日時：2022年1月9日（日）

■場所：立川教会

■説教題：「イエスの焼き印を身に受けている。」

■聖書：新約ガラテヤの信徒への手紙6：11－18（p350）

■讃美歌：83「聖なるかな」・197「ああ主のひとみ」

お早うございます。

すでに、欧米では、大変な勢いでオミクロン株の感染者が増加していました。年末・年始にかけてそれらのニュースを見てはいたのですが、いよいよ日本でも第6波が始まりました。

昨年10月、9ヶ月の時を経てようやく再開された皆集まっの礼拝ですが、これからどうするかを今日行われる役員会で相談したいと思います。徒（いたずら）に恐れることなく、それでいて油断することなく、感染に対処するにはどうしたら良いかを考えます。

さて、ガラテヤの信徒への手紙ですが、今日をもって終わり、来週からはこの手紙と同じように、実際にパウロが書いた手紙の一つであるフィリピの信徒への手紙に入ります。

先にローマの信徒への手紙を学び、今回ガラテヤの信徒への手紙を学ぶ中で、使徒パウロは、ローマの、そしてガラテヤの新しい福音に触れた人々に何を伝えようとしたのかです。

今日与えられた第6章11節から18節の御言葉を通して、パウロの思いに今一度出会いたいと思います。

まず、11節です。

11：このとおり、わたしは今こんなに大きな字で、自分の手であなたがたに書いています。

パウロは、手紙を書く際、その多くは口述筆記でした。自分の言うことを書記に書かせ、手紙の最後に自分の手でサインをするのが常でした。そのパウロが、今回の11節以下では、自分でペンを取り、書いていると言うのです。研究者の中には、ここだけではなく、

ガラテヤ人への手紙全部をパウロが直接書いたのではないかと言う人もいますが、いずれにして

も、手紙の最後のまとめとなるこの箇所は、パウロが特に力を入れた内容であることは間違いありません。

それでは、パウロは再び何を強調しようとしているのでしょうか？

12 節です。

12：肉において人からよく思われたがっている者たちが、ただキリストの十字架のゆえに迫害されたくないばかりに、あなたがたに無理やり割礼を受けさせようとしています。

パウロの福音を学んだ人たちに対する厳しい注意です。「肉において人からよく思われたがっている者たち」と言うのは、パウロの教えに反対し、割礼を受けることを勧め、それによって仲間たちから賞賛を受けようとしている者たちです。

割礼や律法によって救われることを全く否定し、ただ主イエス・キリストの贖いの十字架による恵みによってのみ救われることを主張したパウロは、そのキリストの十字架の故にユダヤ人やローマ人から迫害を受けます。その迫害から逃れるために、ユダヤ人で、パウロと同じようにキリスト者となった者の中には、自ら割礼を受けているだけでなく、異邦人でキリスト者となったガラテヤの人たちにも割礼を勧め、自分の仲間を増やそうとしたのです。しかし、このようなユダヤ人と言うのは、13 節です。

13：割礼を受けている者自身、実は律法を守っていませんが、あなたがたの肉について誇りたいために、あなたがたにも割礼を望んでいます。

割礼を勧めている者は、それでは律法を重んじているかと言うと、そうではない。律法など守っていない。ただ、あなたがたに割礼を受けさせ、仲間を増やしたことを誇りたいために、あなたがたが割礼を受けることを望んでいると言うのです。

この 11 節から 13 節までのパウロの語る内容によっても、ユダヤ人にとって、割礼がどれだけ大きな意味を持っているのかが分かります。

割礼とは、神様から選ばれた民であることの印しでした。そして、モーセ以来、十戒を始めとして与えられた律法を守り、行うことによって、救いに与ることが出来ると堅く信じ

ていました。勿論、律法を完璧に守れる人などいません。だからこそ、年に決められた回数、週の決められた曜日に、犯した罪に対する悔い改めの断食を行ったのです。

皆さんは、今、何を最も恐れているのでしょうか？

日々の生活の糧が失われること、身に病いを負うこと、身内に困ったことが起きることなど、何れも大きな問題です。しかし、私の場合、今ではなく、かつてのことですが、私が最も恐れていたのは、信仰を失うことでした。信仰を失った時の自分を考えることは出来ませんでした。

今、私の人生を根底から支えているのは、神様への信仰です。信仰によってこそ、今を生き、明日を生きることが出来ます。信仰があるからこそ、迷いの中にも決断が出来、信仰があるからこそ、物質的に恵まれることが第一のこととは考えられないのです。

信仰を失うことは、私にとって生きていく基盤の崩壊です。生きる全ての意味の喪失です。朝目覚めてその日を生きること、可憐に咲く花にふと心を奪われること、友と会い、心和む会話を交わすこと、家族の健康が守られ、幼い孫たちの成長を喜ぶこと、そして今、ここにこうして立ち、礼拝を捧げる、それら一切が虚しくなるのです。

ユダヤ人から見れば、異教の民である私ですらそうです。まして、1,000年以上にわたって、与えられた律法こそが選ばれた民の証しであり、それを遵守することによって神の民とされる、救われると信じて来たユダヤ人にとって、それらが否定される事は、自分たちが拠って立って来た基盤、生きる土台が崩されることでした。律法は、たとえ完璧に守ることは出来なくとも、選ばれた民である証しであり、彼らの唯一絶対の誇りであったのです。

ユダヤ教からキリスト教を信じる者になっても、その誇りを捨てることが出来なかったユダヤ人は、異邦人キリスト者にも割礼を勧め、律法を重んじる自分たちの仲間になることを望みました。このような誘いに動揺したガラテヤの人々に対し、パウロは断言するのです。14節。

14：しかし、このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。この十字架によって、世はわたしに対し、わたしは世に対してはりつけにされているのです。

「世」とは、割礼や律法に頼って生きる生き方です。それらを守ることによって、救いを勝ち取れるとする生き方です。しかし、その生き方である「世はわたしに対し、わたしは世に対してはりつけにされている」と言うのは、「世」つまりそのような生き方が、主イエス・キリストの十字架によって滅ぼされたことを意味しています。人が何かを成し得ること、割礼を受け、律法を守る、そのことによって救いを得られることは決して無いことをパウロは断言します。誇るべきは、律法ではない。主イエス・キリストの十字架による恵み、ただそれだけが私たちが誇り得るものであり、それ以外に誇るものがあるはずはないと言うのです。

そして、15 節です。

15：割礼の有無は問題ではなく、大切なのは、新しく創造されることです。

新しく創造される。心の内側から新しく創造されること、パウロはそれだけが大切なことであると述べます。外形的な割礼や、形に表さなければならない律法を守る行為など、大切な問題ではないと言うのです。

それでは、「新しく創造される」とは、どのようなことでしょうか。

どのようなことだと思われますか？

私は、新しく創造されるとは、聖霊の導きによって、心の内に平和が創り出されることだと思います。平和、平安、安らぎと言って良いと思います。それが心を占めることです。先週学んだ第5章のパウロの言葉を引用すれば、霊の実を結ぶことです。自らの心の内を、愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制が占めることです。

そして、16 節です。

16：このような原理に従って生きていく人の上に、つまり、神のイスラエルの上に平和と憐れみがあるように。

新しく創造された者にとって、神のイスラエルとは、パウロが述べた原理である十字架による恵みに生きる全ての人々を指します。そのような人々にこそ、平和が訪れ、神様の憐れみが注がれるようにとの祈りです。

最後に、17、18 節です。

17：これからは、だれもわたしを煩わせないでほしい。わたしは、イエスの焼き印を身に受けているのです。

18：兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊と共にあるように、アーメン。

「イエスの焼き印を身に受けている」。即ち、パウロは、イエス様の奴隷、所有物であると述べます。それは、イエス様と共に生き、イエス様と共に死ぬ。自分の生きることも死ぬことも、全てはイエス様の御手の内にあるとの告白です。

そして、ガラテヤの人々を祝福し、手紙を終えて行きます。

このようにして、パウロは、ただ、主イエス・キリストの十字架による恵みを信じる、それだけが救いへの道であることを語りました。

この手紙は、ガラテヤの人々に向けて書かれた手紙ですが、同じく福音によって新しく創造された私たちに対する手紙でもあります。

私たちの人生には、幾つもの試練や困難な出来事が訪れます。

しかし、その全てを神様は御存知であり、いかなる試練の中に置かれようとも、困難の中に置かれようとも、イエス様は私たちと共におられます。そして、私たちを逃れの場へと導いて下さいます。

そのことを信じて、動かされず、イエス様の後に従い行く者になりたいと思います。

祈りましょう。